

# 日・韓述語体系の対照研究

## — 叙法論的把握から —

李 泓馥

### 要旨

日・韓両言語の述語形式は全体として語構成及び実現する意味が似ている。そこで両言語の述語形式全体を体系として対照するという述語論の方向性が開ける。各述語形式について個別的な意味用法とは別に用法全体を貫いてある形式自身の性格を規定するという叙法的立場からみると、「シタ」「シテイル」と韓国語の形式「했다」「하고 있다」「해 있다」は「現実事態承認」形式、「シヨウ」と「하리다」は「非現実事態仮構」形式、「スル」形と「한다」形は「事態構成」形式と位置づけられ、両言語ともに形式自身の性格は同じだと把握できる。なお、このように述語形式全体を叙法組織としてみるという観点からは両言語のほぼ対応する形式の間で生じる用法のずれなどについても、一定の領域中である目的（どのような意味を表現するか）のためにどの形式（道具）を用いるかという各形式の守備範囲というレベルの小さな違いであると解釈できる。

キーワード：叙法、非現実事態仮構、現実事態承認、事態構成

### 1. 本稿の目的

#### 1. 1 日韓両言語の述定形式の類似性

- (1) これをあげよう。
- (2) やっと試験が終わった。
- (3) 鳥が飛んでいる。
- (4) ガラスが割れている。
- (5) 雨が降るはずだ。

現代日本語の述語形態を決定する広義語尾部分（いわゆる広義助動詞）には三種類がある。それは（1）（2）のように動詞の二次的語尾（山田孝雄氏の用語で言えば複語尾）としてのもの「シヨウ」、「シタ」と、（3）（4）のように「接続詞+存在詞」で構成されるもの「シテイル」、そして（5）のように形式名詞などを中心に構成されるもの「ハズダ」、「ヨウダ」、「ソウダ」などである。一方、韓国語でも述語形態を決定する広義助動詞の要素にあたるものには同じく三つの種類があげられ、しかも意味の面でも日本語との類似性が指摘できる。



〈表 1〉

	日本語の形式	韓国語の形式
語尾系	スル (終止形)	한다
	シタ	했다
	シ (ヨウ)	하리다
存在詞系 (接続詞+ 存在詞)	シテイル	하고 있다(고(接続詞)+있다(存在詞)), 해 있다(어(接続詞)+있다(存在詞))
文末外接形式	ヨウダ、ソウダ、 ラシイ、ハズダ、 カモシレナイ など	<u>모양이다</u> (모양(名詞)+이다(指定詞)), <u>듯하다</u> (듯(名詞)+하다(する動詞)), <u>지도모른다</u> (지(疑問助詞)+도(助詞)+ 모른다(「知れない」に相当する動詞)な ど

これらの事実をみると両言語の述語形式の間でほぼ一対一の対応が考えられる。しかし、一対一対応ですべての問題がすむのではなく、複数の形式をセットとして考えなければならぬ問題がある。

(6) 彼はソウルに3回行っている。 / た。

(6') 그는 서울에 세번 갔다 \*고 있다。 / \*어 있다。 / 었다。

「シタ」に相当

上の(6)の場合、日本語では「シテイル」を「シタ」に言い換えてもあまり意味は変わらない。一方、これにあたる韓国語(6')では、「シタ」にあたとされる「했다」しか使えず、「シテイル」相当の「하고 있다」も「해 있다」も用いることはできない。これとは逆に韓国語では複数の形態が交換可能なのに対し、日本語では一つの形態しか用いられないという場合もある。「状態」を表す場合、韓国語では(7)のように「해 있다」と「했다」のどちらでもかまわない。しかし、日本語の「シタ」の終止法では「状態」を表すような用法はない。

(7) 우리가 깨지 어 있다。 / 었다。

(ガラスが割れている)「シテイル」に相当 「シタ」に相当

(7') ガラスが割れ ている。 / \*た。

また、現在の運動を表現する場合、安定した表現としては日本語では「シテイル」をつけ

る必要があるが、韓国語ではとくに「シテイル」相当の「하고 있다」をつけなくても、「スル」形相当の「한다」だけで安定した表現になりうる。

(8) 今私は勉強をし ている。 / \*する

(8') 지금 나는 공부를 하고 있다. / 한다.

前稿(李泓馥 2006)では両言語の述語形態の全体像について両言語とも道具の性格としては同じものをもっていると言えるのではないかという見解を示したわけであるが、各形式の個々の用法をみていくならば、当然ずれは生じるのである。そのようなずれについて、両言語の述語の個々の形式を、似たもの同士一対一の対応で単に記述する限りでは、ただ相違点があるという指摘にとどまらざるをえないが、前稿のように述語形式全体を体系的に把握した上<sup>5</sup>で比較対照してみるならば、これらの相違点についても、それでも道具の性格自身は同じであり、それぞれの言語の述語形式の体系の中における個々の形式の守備範囲の違いという形で解釈を与えることができると考える。それが本稿の課題である。

## 1. 2 日韓両言語の述語体系を対照する視点

両言語の述定形式を全体として対照研究するという目的のためには個々の形式の分析、記述にとどまらず、その述語形式が全体としてどのような組織をなしているかという把握をもった視点が必要であろう。その一つとして尾上圭介氏の述語論があり、そこでは述定形式全体は叙法組織として解釈される。

尾上氏の叙法とは mood の訳語であって、文を述べ上げるときの述べ方のさまざまに各形式が対応するものと把握される。同氏によると、その述べ方のさまざまは二つの対立軸によって四象限に整理される。一つの対立軸は現実か非現実かであり、「シヨウ」は非現実の叙法形式、「シタ」「シテイル」は現実の叙法形式と位置づけられる。そして、「シヨウ」が「意志」や「推量」といった意味を表すのはその形式が「非現実事態」を述べる述べ方であるという叙法性格からもたらされると説明する。同様に「シタ」「シテイル」が「過去」「完了」「進行中」「結果状態」などという意味を表すのはその形式が現実事態を述べる述べ方であるという叙法性格からもたらされると説明する。叙法組織を整理する上でのもう一つの対立軸は積極的に承認を与えるか(承認形式)、積極的な承認は与えず事態を概念化することとどまるか(構成形式)である。尾上氏の把握では「シタ」「シテイル」は積極的に承認を与える形式だとされ、それに対して動詞基本形である「スル」形(終止形)は承認を与えず、事態概念

5 述語形式全体をどのような体系として把握するかについては1. 2で述べる。詳細は(李泓馥 2006)参照

を構成するだけの形式だと把握される。また、「シヨウ」については承認か構成かの対立軸においては「スル」形（終止形）と同様に構成形式だと把握される。その結果、日本語の述定形式を上への二つの対立軸において叙法組織として整理すると、「シヨウ」は「非現実事態構成」形式、「シタ」「シテイル」は「現実事態承認」形式、「スル」形ではそれ自身は非現実、現実にはかかわらない単なる「事態構成」形式と把握される。

1. 1 でみたおりに韓国語の述定形式というのは、形態、意味の面で極めて日本語と似ている。そこで韓国語の述定形式についても同様に叙法組織を為す叙法形式として位置づけられるのではないかと検討してみたい。なお、表1のように両言語間で対応関係がみいだせる述定形式のほかに相手の言語には対応する形式がみいだせない述定形式も存在する。日本語には否定の助動詞として「ナイ(ズ)」があり、尾上氏の把握では非現実事態の構成形式（非現実事態仮構）と位置付けられるのだが、韓国語においては否定というのは述定形式で表すものではなく、韓国語の叙法形式が実現する意味の範囲の中に否定は入らないという相違点がある。また、韓国語側に存在する述定形式で対応する日本語の形式をにわかに指摘できないものとして「더」と「ㄹ」がある。この二つの形式の詳細な分析及び叙法的把握は別稿に譲らなければならないが、現時点では「더」は「現実事態構成」形式、「ㄹ」は「非現実事態承認」形式と位置付けられるのではないかという見通しをもっている。

以上から日韓両言語の述定形式を叙法組織として整理すると、表2のとおりである。

〈表2〉日韓両言語の叙法組織

	現実事態		非現実事態	
	日本語	韓国語	日本語	韓国語
事態承認	シタ、 シテイル	했다, 하고 있다/ 해 있다		하겠다
事態構成		하더라	ウ(ヨウ)	하리다
	スル(終止形)	한다	スル(終止形)	한다

このような把握の可能性を念頭において、日韓両国語の述定形式を体系的に対照するというのが筆者の目指す研究方向であるが、本稿ではこの内、1. 1 で指摘したような両言語間で対応すると考えられる述定形式間に見られる意味用法をめぐる相違点について、叙法論的視点からはどのような解釈が与えられるかを検討したい。それは両言語とも道具の性格としては同じものをもっていると言えるのではないかという想定(李泓馥 2006)のもと、述語形態を叙法論的に把握する立場から意味用法面で差異が生じるのは道具の使い方が違うのだと解釈していこうという方向性である。そこで本稿で扱う形式は以下のものとし、相手の言語

で似たような道具がない「ない(ズ)」及び「더」「ㄹ」についてはこれ以上触れないことにする。

〈表 3〉

「シヨウ」	—————	非現実事態仮構形式	—————	「하린다」
「シタ」「シテイル」	—	現実事態承認形式	—	「했다」「하고 있다」「해 있다」
「スル」形	—————	事態構成形式	—————	「한다」

## 2. 現実事態承認叙法における日韓両言語の対照

1節でみたように日本語では一般に過去を表すとされる「シタ」と一般に継続を表すとされる「シテイル」の用法が重なる場合がある。これはどういう問題であろうか。

尾上(2000)では、「シタ」「シテイル」が属する「現実事態承認」という叙法世界(意味領域の名前として言えば最広義完了)は基準点からみて「その事態はすでに存在している」という関係づけを含んで事態を述定する(perfect)か、「その運動事態が基準時点を覆って存在している」という関係づけを含んで事態を述定する(progressive)かに下位分類される。そして、「シタ」形による述定は最広義完了の内の perfect、「シテイル」形による述定は progressive と perfect にまたがっており、「シタ」形と「シテイル」形とは叙法(事態の述べ方)としての perfect という部分において重なっている、と把握する。そこで結果として表す意味においても上のような用法の重なりもあってよいことになる。一方、韓国語の現実事態承認形式には「シタ」にあたりと考えられる「했다」と「シテイル」にあたりと考えられる「하고 있다」「해 있다」の三つがあり、それらの用法を全体的にみると、日本語の「シタ」「シテイル」の用法内に収まる。この事実をもって日本語では「シタ」「シテイル」の二つが「現実事態承認」という叙法の形式であるのに対応して韓国語には「했다」「하고 있다」「해 있다」という三つの叙法形式があると考えたい。すると、日本語、韓国語ともに現実事態承認の叙法形式は複数あることになるため、現実事態承認形式のうち、どの意味をどの形が受け持つかを確認することが必要になる。従来形態の一対一対応での記述では相違点として指摘されるにとどまっていた事実も、最広義完了という意味領域に属する各意味を表すための道具個々の叙法形式の使い方の差という形で、体系的に解釈できると考えられる。

### 2. 1 progressive—進行中

(9) 鳥が飛んでいる。

(9') 새가 날고 있다.

動詞「飛ぶ」の語幹 テイルに相当

現実事態承認形式の内、progressive、進行中の意味は日本語では「シテイル」の方が表すが、韓国語の「하고 있다」も語構成的にみれば「고」が「テ」に相当する接続詞、「있다」

が「イル」に相当する存在詞であって、この点では進行中の意味を表す叙法形式においては両言語は完全に並行的である。

## 2. 2 perfect

### 2. 2. 1 状態（結果状態と単なる状態<sup>6</sup>を含む）

(10) ガラスが割れている。

(10' a) 우리가 깨진 어 있다.

動詞「割れる」の語幹 「シテイル」に相当

(10' b) 우리가 깨진 었다.

「シタ」に相当

perfect のうち、状態は日本語では主に「シテイル」、韓国語では主に「해 있다」で表す。日本語の「シテイル」には大きく進行中、状態の二つの意味があるとされるが、韓国語では存在詞系の助動詞「하고 있다」「해 있다」の二つがそれにあたり、二つが全体として「シテイル」の用法をカバーしつつ「進行」と「状態」ですみ分けしているといえる<sup>7</sup>。さらに、韓国語では(10'a)の「해 있다」を(10'b)のように日本語の「シタ」相当の「했다」に言い換えても差し支えない。日本語の「シタ」の終止法ではこのような用法はない。しかし、実は日本語でも非終止法では韓国語のように「シタ」と「シテイル」が交換可能になる場合（彼は変わった（＝ている）人だ）があり、両言語ともに、程度の差はあるものの「シタ」－「했다」と「シテイル」－「해 있다」「하고 있다」が重なりつつ両者で「状態」という意味領域を表現しているという共通性がみいだせる。

### 2. 2. 2 経験

(11a) 私はいままでソウルに3回行っている。

(11b) 私はいままでソウルに3回行った。

(11') 나는이제껏서울에 세번 갔 \*고 있다 / \*어 있다 / 었다.

動詞「行く」の語幹

「シタ」に相当

日本語では「シテイル」の用法には(11a)のようにいわゆる「経験」という用法が指摘できるが、その大部分は「シタ」で言い換えた文もほぼ同じ意味で成り立つ。一方、韓国語で

6 「結果状態」と「単なる状態」は変化過程を含むか否かで分けられるが、分けたとしても形態の選択や意味領域など、本稿での議論上に影響を及ぼすような違いは出ないので一括して扱うことにする。

7 韓国語内部の問題としては「接続詞＋存在詞」系は「어 있다」「고 있다」の二つの形式があり、再帰動詞など一部の動詞を除いては、「어 있다」は状態、「고 있다」は進行というすみ分けがなされている。

はこの場合、「シテイル」相当の「하고 있다」、「해 있다」は用いられず、語尾系の「었」しか用いられない。

### 2. 2. 3 完了 (過去)<sup>8</sup>

(12) やっと試験が終わった。

(12') 가카스로 시험이 끝나 있다.

動詞「終わる」の語幹 「シタ」に相当

(13) 豊臣秀吉は1598年に死んでいる。

(13') 풍신수길은 1598년에 죽 \*고 있다. / \*어 있다. / 었다

動詞「死ぬ」の語幹 「シタ」に相当

perfect のうち、完了は日本語では「シタ」、韓国語でも「했다」で用いられる。なお、日本語では (13) のように「シテイル」で完了を表すこともできるが、「シテイル」の場合は完了というより過去という意味合いが全面に出る。一方、韓国語ではこの場合、「シテイル」相当の「하고 있다」、「해 있다」は用いられず、「했다」しか用いられない。

### 2. 2. 4 完了 (過去) の特殊ケース

「シタ」による表現の中には実際実現していないにもかかわらず用いられるなど、やや特殊といえる場合がある。このような周遍的な用法においては日本語の「シタ」と韓国語の「했다」の間でずれがあるので、ここで少し詳しく「シタ」の周遍的な用法をめぐって対照する。(完了の特殊ケースについては尾上 (1995.2000) の分類を援用する。)

#### 2. 2. 4. 1 想起

(14) あなたは、たしかタバコを吸いましたね。

(14') 당신은 분명히 담배를 피운 었 죠.

動詞「吸う」の語幹 「シタ」に相当 確認疑問終結語尾

日本語では「今思い出した」という場合、「シタ」で表現することがある。韓国語の「했다」にもこれと同様の用法がある。

#### 2. 2. 4. 2 発見的現在

---

8 尾上氏によれば、日本語の「シタ」による「過去」は「完了」の一ケースであり、完了ということが、何らかの条件により、現在と切り離されたものとして意識されると、過去ということになる。



(15) (さき調べたときには気づかなかったのに)

ここにあった! あった!

(15') 여기 있 있 네  
存在詞の語幹 「シタ」に相当 終結語尾

状態動詞において時間的に現在としかいいようのないものであるにもかかわらず、「そのことに今気がついた」という気持ちが全面に出た用法である。このような場合、韓国語の「있다」にも同様の用法がある。<sup>9</sup>

## 2. 2. 4. 3 獲得

(16) よし、これで勝った。

(16') 좋았어, 이제 이기 었다.  
「勝つ」動詞の語幹 「シタ」に相当 終結語尾

日本語では実際にはまだ実現していなくても話し手の気持ちの上では実現したも同然という場合、「シタ」で表すことがある。韓国語の「었다」もこれと同様の用法を持つ。

## 2. 2. 4. 4 要求

(17) (店員がお客さんに向かって)

買った、買った、買った。

「獲得」と同様、実際にはまだ実現していないことであるが、希求内容を実現した姿において言語化し、それを実現するよう相手に行動を要求する用法である。この場合、韓国語の「었다」でこのような表現はできない。

以上、完了(過去)の特殊ケースとしていくつかを対照してみたが、客観的に既実現ともいえる「想起」は両言語で共通するが、客観的に既実現ではないという周辺的な用法においては「獲得」までは両言語とも表現しうるが、韓国語では「要求」までは表せないという違いが指摘できる。

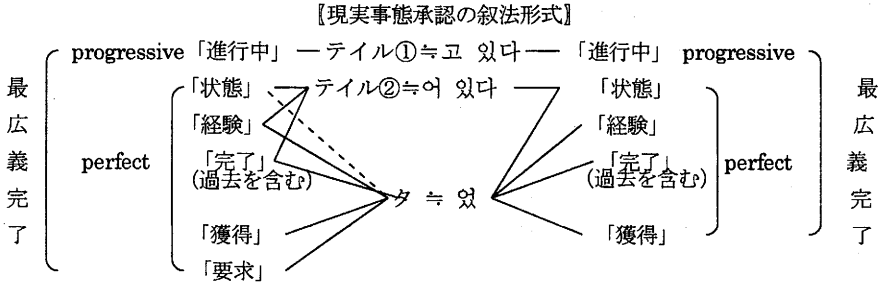
なお、「シテイル」に進行中を表すものと perfect を表すものと二種類があることの解釈を認める論理に関しては、尾上(1995,2000)の考え方に従う。同氏によれば、「テ」に付帯状況(同時)の「テ」と継起の「テ」の二種類があることに並行して「シテイル」にも progressive (進行中)の「シテイル」と、perfect の「シテイル」の二種類が生ずるということになる。

9 なお、井上優・生越直樹(1997)では発見的現在における「シタ」と「었다」の違いについて指摘し、両言語とも発見的現在の用法はあるものの「었다」の方が使える場面により制限がかかると説明している。

それはちょうど韓国語の「하고 있다」と「해 있다」の区別にきれいに対応している。

2. 1では両言語において最広義完了に属する叙法形式の個々が実現する意味用法の幅を確認した。それは〈表4〉のとおりまとめられる。

〈表4〉



3. 非現実事態仮構叙法における両言語対照

尾上氏は「シヨウ」を、非現実事態領域に位置する事態を、それが成立するとの承認を与えることなく、単に一つの事態表象として思い描くだけの形式、「仮構」の形式であると把握する。(尾上 1997a, 1997b, 1999, 2001)

1. 1 非現実事態の叙法形式

(終止法の場合)

(18) これをあげよう。

이것을 드림 리다.

動詞「あげる」の語幹 「う・よう」に相当

(19) この中にはすでに事件を知っている人もあろう。

이 중에는 이미 사건을 알고 있는 사람도 있 으 리다.

存在詞の語幹 連結語尾 「う・よう」に相当

(非終止法の場合)

(20) あろうはずもない奇跡を信じてしまった。

있 을 리도 없는 기적을 믿어 버렸다.

存在詞の語幹 「シヨウ」に相当

「シヨウ」は終止法では (18)、(19) のように「意志」、「推量」を表すが、非終止法では (20) のようにあまりはっきりした意味はとらえにくく、あえて言うなら「可能性」、「妥当性」などと呼べそうな意味が現れる。このように終止法、非終止法でそれぞれ上のような意

味を表すことについて尾上氏は「シヨウ」が非現実事態仮構の形式であるという把握から説明できるとする。「シヨウ」形は本来、仮構された非現実事態を提示しているのみであり、それが非終止法でのあまりはつきりしない意味である。それに対し、終止法の場合はそれが終止法であるがゆえにその非現実事態が存在か希求の意味を帯びざるをえず、その際、存在承認の側で用いられれば「(今ここにはないが)いつかどこかでその事態が存在(成立)する」という意味、即ち「推量」になり、存在希求の側で用いられれば、その事態の実現を自分で求めるところから(一人称領域の場合は)「意志」の意味になるのである<sup>10</sup>。一方、韓国語では「하리다」という形式があり、これも終止法では「意志」「推量」を表し、非終止法でははっきりした意味はとらえにくくなる。この事実からすれば、日本語の「シヨウ」と同様に、「하리다」は非現実事態仮構の叙法形式の語尾として位置付けることができると考えられる。<sup>11</sup>

なお、韓国語の「리」の場合には日本語にはない韓国語独自の用法がある。

(21) 慶 ; 경축할 경,	信 ; 믿을 신,	彩 ; 채색할 채
경축하다+ㄷ	믿다+ㄷ	채색하다+ㄷ
(いわう—けい)	(しんじる—しん)	(いろどる—さい)

これは漢字の読みの表記法で、訓読みと音読みを「리」(ここでは非終止形の「ㄷ」<sup>12</sup>)でつないで表記する、というものである。このような表現がなされる場合というのは読みを表記するだけであって、その動詞で示される運動が実際、いつ、どこで起こるのかを意識していない、むしろそのようなことを問うべきでない環境である。そのために、まさに非現実領域の概念として提示するだけの「ㄷ」が用いられていると考えられ、非現実事態仮構の叙法形式がもちうる用法であると解釈できる。

### 3. 2叙法の衰退と文末外接形式の発達

尾上氏は、「シヨウ」・「シタ」など複語尾の叙法形式(の語尾)としての本来の性格は衰退してきており、個別意味対応のマーカ―になりつつあるとする。特に非現実事態仮構の叙法形式の衰退は著しく、「シヨウ」はほぼ「意志」の専門マーカ―になりつつある。そして、

10 詳しくは尾上(1997a,1997b,1999)参照

11 詳しくは拙稿(2004)を参照されたい。

12 拙稿(2003a)では韓国語の先語末語尾(本稿で語尾系の助動詞相当としたもの)とその連体形にあたる冠形詞形との対応関係を日本語の動詞・助動詞にみられる「活用」相当のものともて、それぞれ一つの語の「終止形」と「連体形」という「活用」と把握した。

「推量」の側は叙法形式ではない「文末外接形式」<sup>13</sup>（「ヨウダ」「ソウダ」「ハズダ」「らしい」「タロウ」など）が発達している。非現実事態仮構の叙法形式の衰退という傾向は韓国語でも同様に指摘できる。「하린다」は現代韓国語では詩くらいでしか用いられなくなり、しかもわずかながら用いられるのは「意志」のマーカ―としてである。そして「推量」の側では表1で述べたように「形式名詞＋指定詞」などの文末外接形式が発達している。

#### 4. 事態構成叙法における両言語対照

尾上圭介(1982, 1995, 2000)では「スル」形（終止形）の性格を、事態をただ事態のタイプとして、いわば素材的、前状況的に述定する形式、つまり事態をただそのものとして直接的に言語化するだけの形式であると主張し、このような把握からは「スル」形の全用法が説明できるとする。

##### 4. 1 「スル」形（終止形）と「한다」形

日本語の「スル」形（終止形）を動詞のもっとも基本的な形ととらえるならば、それに対応する韓国語の文表現において、もっとも基本的な動詞形態は「한다」形だと考えたい。しかし、両形態の意味、特に時間的な意味に注目すると、一般的に運動動詞の「スル」形は未来を表すとされるのに対し、「한다」形は「現在形」と呼ばれるとおり現在を表すという大きな傾向の差がある。

(22) 私は勉強をする。(未来)

(22') 나는 공부를 한다. (現在；日本語で訳すなら「シテイル」にあたるような安定した「現在表現」)

ところが、実際はこれらの形式がもつ時間は、ある特定の時間（例えば未来）に限られるものではない。日本語でも「犬が走る！」、「人形が笑う！」などのようにある場合には現在を表したり、日記・記録などの「今朝、太郎が訪れてくる」のように過去を表したりする場合も頻度としては少ないながらもあり、さらに一般論としての「水は 100 度で沸騰する」のように個別時間性を超越した場合もある。尾上氏は「スル」形がこのような意味を持ちうるのは、これらの意味は「スル」形自身のもっている意味ではなく、単に事態を構成するにすぎない叙法形式が様々なに用いられた場合に結果的に読み取れる意味にすぎないと説明する。

---

13 尾上(2000)では、文末外接形式は動詞述語の一角、述定形式の一部と言うより句(節)の外に付いて話者のとらえ方を表すものとして位置づけられるべきだと主張する。

このような考え方に立つと、韓国語の「한다」形も現在の他にも以下のような用法<sup>14</sup>をもちうることから「スル」形と「한다」形は叙法形式上、ともに事態構成形式と位置づけてよいと考えられる。

(23) 달은 지구 주위를 돈다(月は地球の周りを回る。: 真理)

(24) 배는 내일 오후에 고베에 도착한다.(船はあす午後神戸につく。; 確かな未来

〔予定〕)

#### 4. 2 事態構成形式相互でのすみ分け

「シヨウ」と「하리다」は「非現実」という縛りがあるだけで、事態構成形式という限りでは「スル」形や「한다」形と同じである。そこで事態構成形式であるという点をもって用法上接触する可能性がある。3. 1 でみたような非終止法での「シヨウ」の用法は現代語ではあまり使われず、「スル」形で言えば済むものが多い。

(25) あろう (=ある) はずもない奇跡を信じてしまった。

これは日本語において非現実事態の叙法形式が衰退したことによって、非現実事態の場合でも事態内容を提示するだけなら単なる事態構成形式の「スル」形がそこまで拡張して用いられるようになったものと解釈される。一方、「하리다」(の非終止法「ㄹ」)は「한다」形に言い換えられないものが多く、非現実事態であれば義務的に「ㄹ」が選択される場合が多い。この点からは、両言語とも非現実叙法が衰退しているとはいえ、韓国語では日本語ほどの衰退はみられず、日本語と比べると、非現実事態仮構の叙法が現代語にも生きているといえる。

(26) (警察庁はこの制度が密入国や不法就労を斡旋するブローカーに)

악용되고 있 을 / \*는 우려도 있 는 것으로 보고, . . . .

(悪用されている?? よう / いる 恐れもあるとして摘発を強化するとともに  
て. . . . .)

(26) では、「悪用されている」ことは「恐れ」の内容であって、実際に起こったことを言っているのではない(事態のとらえ方において非現実領域である)ため、韓国語では義務的に「ㄹ」が使われる。この他にも、韓国語の方が日本語より非現実仮構の叙法的性格が生き残っているという事実は文末外接形式の接続の仕方においても指摘できる。

韓国語の文末外接形式は(日本語の場合は、動詞の終止形と連体形は同形であるので、いづれとも判定しがたいが、「ヨウだ」、「ハズだ」、「ソウダ」など名詞由来の文末外接形式に対しては連体形で接続すると考えてよい)文末外接形式を構成している形式名詞に対して動詞

---

14 高永根(1998)では中世韓国語において「한다」形のもとの形態は、現在、過去、未来の時制を表し、さらに時間と無関係な用法もあったと指摘している。また、김동식(1988)では現代語でも同様の用法があると指摘している。

連体形で接続するという形をとり、「動詞連体形＋文末外接形式」という構成をとる。ここで韓国語の推量表現の場合、もとの文に文末外接形式を接続させようとすると、(27)のように、文末外接形式なしで言い切る場合のもとの文の述語の連体形ではなく、(28)のように特に「ㄷ」が必要になる場合がある。

(「雨が降ったはずだ。')

(27) 비가 \* 온 터 이다.

「降る」の語幹＋「ㄴ(過去連体形)」＋名詞＋指定詞

(28) 비가 왔 을 터 이다.

「降った」の語幹 ＋ 「ㄷ」 ＋ 名詞＋指定詞

このように推量表現の表しわけを文末外接形式が担うようになった現代韓国語においても、その接続には(推量内容は所詮非現実事態であるということをもって)非現実事態仮構の叙法形式である「ㄷ」が選ばれる。このことから「非現実」という叙法論的な意識が韓国語にはまだ生き残っていると考えることができる。

〔表 5〕非現実事態仮構の叙法の衰退

		韓国語		日本語	
		叙法語尾	備考	叙法語尾	備考
終 止 法	推量		文末外接形式が発達		文末外接形式が発達
	意志	하 리 다	「한다」形に交換可	ウ(ヨウ)	「スル」形に交換可

非 終 止 法	非現実事態の提示	할		ウ(ヨウ)	「スル」形に交換可
			「하는」形に交換可		

#### 4. 3 事態構成形式がおびる時間性

4. 1から「スル」形と韓国語の「한다」形を同様の概念表示形（従って述語として用いられた場合は事態の素材的表示形）とみるならば、両形態がおびる時間性の違いをどうみるのか、という問題が生じる。日本語でも古代語では「スル」形（終止形。形に忠実に言うなら古代語では「ス」形ということになる）が現在を表していたという事実があり、韓国語の概念表示形式「한다」形がおびる時間性は古代語の「スル」形（終止形）がおびていた時間性と対応するようである。日本語内部で古代語と現代語で「スル」形（終止形）がおびる時間性が変わったとも言える問題について尾上(1997a)は、古代語においては、非現実事態の叙法が積極的に生きていたために、それとの対立において事態構成形式にすぎない「スル」形（終止形）は、それ自身で現実事態の描写であることが保証されていた（それゆえ目の前の描写でありえた）が、近現代語では非現実事態叙法が消滅（変質）したために、それとの緊張関係の消滅によって「スル」形（終止形）自身は積極的に現実事態描写の形式であることを維持できなくなって、単なる事態構成形式そのものでしかありえなくなったという。そこで単に「スル」形で事態を構成するだけでは現実・非現実事態両方の可能性が残ってしまうために、積極的に現実事態（＝現在）であることを語るためには、「シテイル」形が必要とされるようになり、結果的に「スル」形が時間的な（一回的）事実の記述に用いられる場合は未来を表すケースが目立つようになったものと解釈している。

このように概念表示形式がおびる時間性は、その叙法としての消極性ゆえに、他の助動詞（叙法形式）との張り合いの結果によって決まるものと考えられる。つまり、概念表示形式がどのような時間性の表現に用いられるかは他の助動詞との張り合いによってずれてよいものであり、現代日本語と韓国語で事態構成形式がおびる時間性がずれるのは、非現実事態を表す叙法がより衰退した日本語に対し、韓国語は日本語ほどは衰退しておらず、古代日本語に近い位置にあるからだと解釈されるのである。

〈表6〉語尾系の助動詞の時間性<sup>15</sup>

	古代 日本語	現代日本語		韓国語	
		叙法語尾	備考	叙法語尾	備考
未来	非現実事態	シヨウ	いわゆる		いわゆる
	仮構の叙法 形式（未然 形接続のム <sup>16</sup> ）	「スル」形	推量の文末 外接形式	하리다	推量の文末外接 形式
現在	事態構成叙 法形式の「ス ル」形（終 止形）		「シテイル」 が担う	한다	= 「하고 있다」 でも表現可能
過去	現実事態承 認の叙法形 式（連用形 接続のいわ ゆる時の助 動詞群 <sup>17</sup> ）	シタ		했다	

まとめ

本稿では日・韓両言語のいわゆる助動詞の実現する意味の世界をめぐって、道具自身の性質としてはほぼ完全に対応すると言えるのではないかという想定（李泓馥2006）のもと、述

15 本稿の立場ではそれぞれの述語形態を時間性を表し分けるためのマーカーとはみない。例えば、実際に4. 1でみたとおり「スル」形の時間性といっても過去、現在、未来それぞれに「スル」形が用いられる場合がある。だからこそ叙法的把握が必要なのであるが、ここでは大きな傾向として過去、現在、未来という時間性を表すという目的のためにどの叙法形式を用いるかを示した。

16 現代語の「ウ（ヨウ）」もこれらの末裔にあたる。

17 現代語の「タ」もこれらの末裔にあたる。



語形態を叙法論的に把握する立場から述語全体を体系的に対照する方向性を示した。形態を  
一対一で比べるのではなく、叙法的性格の面で共通性をもった複数の形態を全体的に対照す  
ることによって、両言語の類似点は勿論、相違点についても叙法性格からそのような違いが  
ありうる違いであると解釈できるものであった。なお、複数の形態間での意味用法のずれ、  
すみ分けについても両言語ともに道具の適用のしかたの違いという見方からの解釈ができた。

## 参考文献

(日本語文献)

- 井上 優 (2001) 「現代日本語の「タ」」「[タ]」の言語学」、ひつじ書房
- 井上 優・生越直樹 (1997) 「過去形の使用に関わる語用論的要因—日本語と朝鮮語の場合—」 国立国語研究  
所編『日本語科学1』国書刊行会
- 生越直樹 (1995) 「朝鮮語ㄷ타形、해있다形 (하고 있다形) と日本語シタ形、シテイル形」『研究報告集』16、  
国立国語研究所
- 生越直樹 (1997) 「朝鮮語と日本語の過去形の使い方—結果状態との関連を中心にして—」 国立国語研究所編  
『日本語と朝鮮語 (下)』くろしお出版
- 尾上圭介 (1982) 「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』一卷二号、明治書院
- 尾上圭介 (1995) 「グラウンディング形式としてのシタ・テイル」『第4回CLC言語学集中講義』要旨 (尾上200  
0と合わせて尾上 (2001) 第3章第2節に収録)
- 尾上圭介 (1997a) 「動詞終止形と不変化助動詞の叙法論的性格」『文法懇話会発表』、尾上 (2001) 第3章第3節  
に収録
- \_\_\_\_\_ (1997b) 「叙法論としてのモダリティ論」、『第6回CLC言語学集中講義』要旨、尾上 (2001) 第3章第  
4節に収録
- \_\_\_\_\_ (1999) 「文の構造と主観的意味—日本語の文の主観性をめぐって・その2」、『言語』28巻1号、尾上  
(2001) 第3章第6節に収録
- \_\_\_\_\_ (2000) 「スル・シタ・シテイルの叙法論的把握」『2000年度文法学研究会連続公開講義』要旨、尾上  
(2001) 第3章第2節に収録
- \_\_\_\_\_ (2001) 『文法と意味Ⅰ』、くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2004) 「主語と述語をめぐる文法」、『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』、朝倉書店
- 李泓韻 (2003a) 「現代韓国語の語末語尾の形態分析—日本語の連体形の用法から」『日本学報56集』、韓国日本  
学会
- \_\_\_\_\_ (2003b) 「現代日・韓両国語の推量表現における叙法論的性格」、韓国日本語学会第10回大会口頭発表、

韓国日本学会

- \_\_\_\_\_ (2004) 「리/ㄹ」의 多義性의 構造—日本語の「う・よう」の叙法論的把握から『日本語文学20集』, 韓国日本語学会
- \_\_\_\_\_ (2006) 「日韓両言語の意志、推量を表す助動詞—述語組織全体の対照研究にむけて—」、『日本語学論集』2号、東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室、双文社
- 川村 大(1998) 「事態の妥当性を述べるべしをめぐって」、『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』、汲古書院
- \_\_\_\_\_ (2002) 「叙法と意味—古代語べしの場合—」、『日本語学』21巻2号、明治書院
- 河野六郎(1952) 「中期朝鮮語の時稱体系に就いて」、東洋学報34-1-4、河野六郎(1979)に再収録
- 河野六郎(1979)『河野六郎著作集1』、平凡社
- 金田一春彦(1953a) 「不変化助動詞の本質—主観的表現と客観的表現の別について(上・下)」、『国語国文』二十二巻二号・三号
- \_\_\_\_\_ (1953b) 「不変化助動詞の本質、再論—時枝博士・水谷氏・両家に答えて」、『国語国文』二十二巻九号
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房
- 野間秀樹(1988) 「〈하겠다〉の研究—現代朝鮮語の用言のmood形式をめぐって—」、『朝鮮学報』第129輯、朝鮮学会
- \_\_\_\_\_ (1990) 「〈할 것이다〉の研究—再び現代朝鮮語の用言のmood形式をめぐって—」、『朝鮮学報』134輯、朝鮮学会
- 村田 寛(2001) 「現代朝鮮語の〈-ㄴ-〉連体形について」、『朝鮮学報』第175輯、朝鮮学会
- (韓国語文献)
- 高永根(1991)『國語形態論研究』、서울대학교출판부
- \_\_\_\_\_ (1998)『중세국어의 사상과 서법』、탑출판사
- \_\_\_\_\_ (2000)『표준중세국어문법론』、집문당
- 김동식 (1988) 「선어말어미 {느} 에 대하여」 『언어13권1호』, 한국언어학회
- 김영희(1981) 「회상문의 인칭계약과 책임성」、『국어학』10
- 나진석 (1953) 「未來時相補助 리 와 겠 의 交替」 『國語国文学6』
- 남기심・고영근(1987)『표준 국어문법론』、탑출판사
- 남기심(1995)『國語文法の 時制問題에 關한 研究』、탑출판사

- 노마히데키(1996) 「현대한국어의 대우법 체계」, 『말』 제21집 연세대학교 연세어학원 한국어학당, 노마  
 히데키(2002b)에 재수록  
 \_\_\_\_\_(2002a) 「한국어 문법교육의 새로운 전개를 위하여-특히 일본어 모어화자를 위하여-」, 『외  
 국어로서의 한국어교육』 제27집, 연세대학교 연세어학원 한국어학당  
 \_\_\_\_\_(2002b) 『한국어 어휘와 문법의 상관구조』, 태학사  
 서정수(1992) 「‘(있)-던’에 관하여」, 『국어문법의 연구 I』, 한국문화사  
 \_\_\_\_\_(1992) 「‘더’와 회상 시제-종결법과 인용법의‘더’를 중심으로」, 『국어문법의 연구 I』, 한국문화사  
 \_\_\_\_\_(1996) 『국어문법』, 한양대학교출판원  
 이기갑(1987) 「미정의 어미‘- 으리-’ 와 ‘- 겠-’ 의 역사적 교체」, 『말12집』, 연세대학교 한국어 학당  
 이진경(1998) 「‘-던’의 통사제약과 의미-‘더-’와의 관련성을 중심으로」, 『국어문법의 심층2』, 태학사  
 伊藤英人(1994) 「中世韓国語の 하나다와 하다가 대하여—三網行圖諺解의 用例分析」 『朝鮮學報百五十一  
 輯, 朝鮮學會  
 임흥빈(1974) 「명사화의 의미특성에 대하여」, 『국어학』 제2집, 국어학회, 임흥빈(1998)에 재수록  
 \_\_\_\_\_(1980) 「{-겠-} 과 대상성」, 『한글』 제170호, 한글학회, 임흥빈(1998)에 재수록  
 \_\_\_\_\_(1982) 「선어말{-더-}와 단절의 양상」, 『관악어문연구』 제7집, 서울대학교 인문대학 국어국문학과  
 임흥빈(1998)에 재수록  
 \_\_\_\_\_(1993) 「다시 {-더-}를 찾아서」, 『국어학』 23, 국어학회, 임흥빈(1998)에 재수록  
 \_\_\_\_\_(1998) 「부정법 {어} 와 상태진술의 {고}」 『국어문법의 심층1』, 태학사  
 장경희(1985) 『현대국어의 양태범주 연구』, 탑출판사  
 최동주(1995) 「국어 시상체계의 통시적 변화에 관한 연구」, 서울대 박사학위논문  
 최현배(1937, 1989) 『우리말본』, 정음사  
 허 용(1968) 『우리옛말본』, 샘문화사

(イ ホンボク 大学院人文社会系研究科 博士課程修了)